

ネットの「世間化」進んだ

新型コロナウイルスの影響で、ITなどのテクノロジーを使ったリモートワーク（遠隔勤務）やオンライン授業が急速に普及・定着し、人々はネットを介して、意思疎通できることを体感した。静岡文化芸術大の加藤裕治教授（メディア文化論）に、コロナ禍でオンラインやインターネットを通じたコミュニケーションが何をもたらしたのかを聞いた。

（細谷真里）

静岡文化芸大 加藤教授に聞く



かとう・ゆうじ 1969年、名古屋市生まれ。千葉大学文学部卒。メディア論、文化社会学を専門とし、メディアが社会に与える影響などを研究している。著書に「映像文化の社会学」「アンチ・スペクタクル」など多数。

「コロナはどんな生活の変化をもたらしただのか。個人的な話をする、コロナの影響で、前期は大学のゼミもオンラインで行っている。実は、三年生は、ゼミの面接以来、対面では一度も会っていない。コロナ禍では、対面で人と会う機会が減り、時間ができた

分、それぞれ生活や人生、環境などを見直すきっかけになったと思う。そんな中、会員制交流サイト（SNS）でのコミュニケーションもより盛んに行われた。政治が目が向く人も増え「アベノマスク」や「給付金問題」などコロナに対する政策に注目が集まった。検察官の定年延長問題では、批判や議論がS

政治動かす力 / 生身の希薄さ 暴走も



NSで盛んとなり、一つの「世論」に。最後は週刊誌報道があったとはいえ、ネット世論がこんなに直接的に政治を動かしたのは初めてではないか。

一方で、SNSといえば、誹謗中傷もより目立った。人気リアリティー番組に出演していた女子プロレスラーの木村花さんが亡くなる痛ましい事件は衝撃を与えた。ある言動や不祥事などに対し、SNSで多くの人が批判や誹謗中傷することで「この人はたいてい悪い」という

雰囲気醸成され、過激化する風潮が増しているように感じる。ある種、ネット空間の「世間化」が進んだ、顕在化したといえるのではないか。

「ネット空間の「世間化」

「世論化」の背景は、

SNSなどで「趣味」「社会問題の議論」などある目的のみで集まるコミュニケーションが増えている。関心のある人たちが集まったり「世論」を作り上げるなど目的の達成には確かに効率が良い。しかし、仲間

や議論の相手を一人のさまざま側面や立場を持った生身の

「人間」として見づらくなるといふ危険性があると感ずる。そのため「誰かをたたく」目的の人が集まった時、暴走してしまう。

今回急速に普及したりリモートワークやオンライン授業なども、「会議」「授業」など切り分けられた目的のみになりがちだ。その場の空気感や表情、しぐさ、相手の状況など、一度に得られる情報は対面に比べたら圧倒的に少なく、雑談など関係の潤滑油の役割を果たすコミュニケーションも減ってしまつた。効果的かもしれないが、こればかりに頼ることは懸念がある。

今後、必要になってくるオンラインやSNSでのコミュニケーションのあり方は、

対面の機会が少なくなればなるほど、互いの状況など情報を補うため、言葉を尽くす意識が必要になる。また、どんな相手も生身の人間であるという想像力を忘れないこと。やっぱり対面でのコミュニケーションとうまく共存させていく必要がある、と感ずる。近々ゼミ生と「オンライン飲み」をやるのか、と話しているが、後期には対面でのランチ会もぜひ開きたい。

◇

コロナという感染症を経験し、私たちの生活は何が変わったのか。今後はどう変わっていくのか。県内外の有識者の視点から考えたい。

（随時掲載します）